

語りから探る保育士の育ちと専門性

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
森 希理恵

2001(平成13)年に児童福祉法の一部改正が行われ、保育士資格が制度上からも明確に専門職と認められるようになり、共働き家庭の増加や少子化・核家族化による子育て環境の変化に伴って保育園に求められるものも多様化し、保育士が子どもの社会化に果たす役割も重要になってきている。しかし、保育園に対するイメージは、いまだ家庭の補完的機能である託児所的な施設であり、保育士の仕事も親の子育てを代替する仕事であるというイメージが強いといえる。

保育士資格が専門職となってから、保育士の専門性についての研究もみられるようになってきたが、まだ現場の保育士を対象にした保育士の専門性についての研究は数多くはみられない。そこで本研究では、保育園に勤務する保育士にインタビュー調査を行い、保育士が保育士としての育ちや専門性の意識をしているのか、保育士の専門性とはどのような経験によって身につけていくのか、保育士の専門的な役割や資質についても考察することを目的とした。

本研究は調査1として、保育士12人に半構造化インタビューを行い、保育経験の中で印象に残っている出来事について語ってもらい、保育士が経験を重ねどのように育っていくかの検討を行った。検討の結果、保育士の育ちには、子どもや保護者、同僚の保育士との関係性が大きいことがみられ、語りの中からそれぞれの関係性に関する語りを取り上げて考察を行った。しかし一方で、保育が日常性に近い営みであるために、保育士はあまり自分の育ちについて考えてこなかったこと、今まで自分の育ちについての経験を語る機会がなかったことも示唆された。

そこで調査2として、語り合うことによる相互作用で、個別インタビューでは語られなかった思いが引き出されることを想定し、保育士6名によるグループインタビューを行い、相互作用が働いたと思われる語りを取り出して考察を行った。

本研究を通して、保育士は様々な関係性を通して育っていることが示され、保育士の育ちには関係性を構築する力が重要であること、さらに、保育士の専門性は、保育士自身の根底にある保育を通して培われてきた保育観と、そこに専門的な知識や理論が重ねられていくことで深まっていくものであることが示唆された。

また、人に語ることを通して、自分自身の保育観や子ども観について客観的に考える機会となり、保育観が新たに再構築されることが見出された。他者の語りを聞くことを通しても同じような効果があると考えられ、保育士を主体とした経験を語り合う場の設定は、保育士が意欲をもって働き続けるためにも意義があるものであると考えられる。